

母子ユニットでの活動が 私に残してくれたもの

第二代健康科学研究科長、第二代保健福祉学専攻主任

小林 隆 児

この度、東海大学大学院健康科学研究科が設立20周年を迎えられたとのこと、まことに喜ばしい限りです。こころよりお祝い申し上げます。当時の大学教員生活が今の私に残してくれたものは何か振り返ることでお祝いの言葉にかえさせていただきたいと思います。

1994（平成6）年春、私は九州を離れ、運よく健康科学部準備室に席を与えていただきました。準備室所属の教員は原則講義や学生指導の義務がないのでいたって自由な生活を送っていました。主たる業務は、健康科学部をどのような学部にするか、白紙の状態から図面を描くことでしたが、今振り返ると、これは私の人生においてとても貴重な経験だったとつくづく思います。私は自分の夢を実現するために奔走しました。それが母子ユニットという、今でも世界に類を見ない恵まれた臨床研究施設でした。私は乳幼児を養育者との関係を通して観察し治療する臨床活動を開始しました。最初は学生もほとんどいない状態で大変でしたが、当時の助手の方や研究仲間の協力を得てなんとか続けていきました。次第に学生たちがたくさん参加してくれるようになり、臨床研究活動も軌道に乗りました。

当初、この活動は自閉症をはじめとする発達障碍の早期診断、早期治療、さらには予防を目標にしていたが、次第にアタッチメント形成の重要性を思い知らされるにつれ、精神障碍全般の成因に深く関係するものであることがわかってきました。ただ、本当にその重要性を意識するようになったのは、東海大学を離れてしばらく経過してからでした。「親を亡くして初めてその有り難さを知る」経験でした。

今は西南学院大学で教員生活を送っていますが、数年前にとっても嬉しいことがありました。福岡市には乳幼児と母親の溜まり場を提供する子どもプラザという施設がありますが、そこの職員向けの研修会で私が講師を務めたとき、母子ユニットで記録した映像を供覧し、その母子関係をどう捉えたらよいか、参加者に尋ねたのです。するとほとんどの参加者は肯定的な関係だと評価していたのですが、一人だけ気になる点を明確に指摘した参加者がいました。会が終わってから彼女が私に近づいて、「私は東海大学健康科学部社会福祉学科の卒業生です。先生の講義も受けていました。」と話してくれました。乳幼児に接することを日常業務としている方達ですから、子どものことについてはある程度の経験豊かなはずですが、私が供覧した母子関係の観察で子どもがいかにか母親に自分を出せずに悶々としているか、その苦しみと不安を感じとれた方はほとんどいなかったのです。暗澹たる気持ちになりました。でもそんな気持ちを救ってくれたのが本学の卒業生だったのです。私にとって忘れがたい記憶になりました。

健康科学研究科 20周年を迎えて

第三代健康科学研究科長

野 田 節 子

20周年おめでとうございます。1999年4月に新設された修士課程の研究指導教員（看護学専攻）として新分野の教育に携わることとなりましたが、実験研究領域で研究・研究指導を行ってきた私にとって、看護学専攻や保健福祉学専攻領域の研究テーマや研究方法には戸惑いがありました。とくに「質的研究」は難しく指導教員の先生方に質問に行ったり、発表を聞いたりして何とか理解しようと必死だったことが懐かしく思い出されます。

「学び」という言葉も当初は慣れませんでしたでしたが気が付いたら自ら学生に言っていました。

異なる領域の様々なテーマに興味深く傾聴できるようになった頃、健康科学研究科長として2006年4月から2011年3月の定年退職までの5年間を過ごすことになりました。

新設から年を重ね、専門看護師の育成や両専攻の枠を超えた連携もみられるようになり、さらにすすめて保健医療福祉の分野を統合する高度専門職育成、指導

教員の養成の必要性を実感し、2008年頃から2011年度設置を目指し健康科学研究科、博士後期課程、健康科学専攻の設立を計画し申請しましたが実現に至りませんでした。膨大な時間と人力を費やし空しさが残りましたが、将来につながる経験になればと思っています。力不足を申し訳なく思っています。

とはいえ研究科長の5年間は、楽しく実りのある時間でした。看護学科の先生たちとは勿論ですが、社会福祉学科の先生たちとも触れ合い真剣に話し合い、信頼できる友人を得たことは素晴らしい役得でありました。ALSと共に生きる佐々木さんが2009年9月に無事修了式を迎え、高野学長が段から降りて学位記を直接手渡してくださった光景は鮮明に思い出されます。尊敬の気持ちで一杯です。最近偶然に看護学専攻（家族看護）の一期生の方にお会いしました。勤めながら学位を取得され現在看護学部の教授で活躍されています。「楽しく充実した2年間」とのことでした。20年間を経て多くの修了生が幅広い分野で指導的に活躍している様子を聞くたびに教育と研究に真摯に向きあう大切さと積み重ねてきた年月の確かな重さを感じます。それぞれの年月を大学院修士課程の教育・運営に力を尽くしてくださった教員、職員の皆様に敬意を表したいと思います。益々の発展を祈っています。